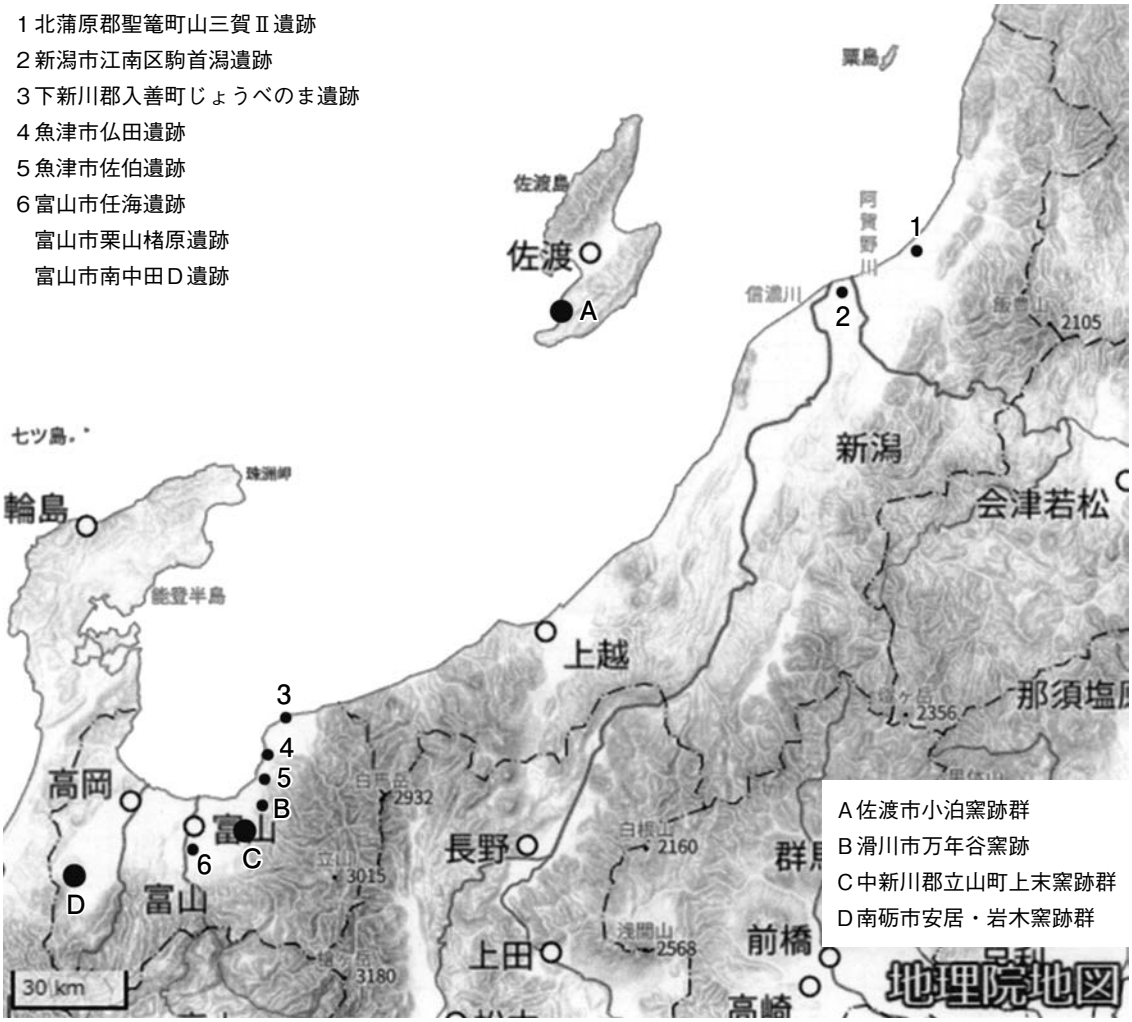
富山県東部の佐渡小泊産須恵器

春　日　真　実

はじめに

佐渡市羽茂地区にある小泊窯跡群は９世紀を中心に稼働した新潟県内最大の須恵器窯跡群（註１）であり、小泊窯跡群で生産された須恵器は佐渡島内だけでなく、越後やその周辺にも流通している。小稿で富山市・魚津市・入善町に所在する遺跡から出土した小泊産須恵器を示し、小泊窯跡群で生産された須恵器（以下「佐渡小泊産須恵器」とする）の流通状況を確認するとともに、富山県東部と越後・佐渡の９世紀を中心とする時期の土器編年の平行関係についてもふれる。

第２・３・７図の遺物番号は各報告書の報告番号に一致する。佐渡小泊産須恵器か否かの判断は筆者が目視で行い、小泊産須恵器と判断した須恵器は遺物番号の下あるいは右にkを付した。小泊産須恵器の時期表記は筆者の編年（春日2019、第１表）を用いる。



第１図　主な遺跡の位置

1　佐渡小泊産須恵器を確認した遺跡（第２・３図）

（１）魚津市仏田遺跡（公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所2013）

魚津市仏田に所在し、片貝川左岸の微高地上に立地する。現在の海岸線からは約１km内陸である。富山県下で最も多くの佐渡小泊産須恵器が出土している遺跡と考えている。魚津市仏田遺跡出土の土師器のうち、遺物（報告）番号の左側に○がついているものは赤彩土師器、●がついているものは黒色土器である。

SK2113

長軸1.42m、短軸1.32m以上、深さ0.53mの不整形の土坑で、覆土は３層に分かれる。出土土器は16点が報告されている。54～57は須恵器杯蓋で、口径は11.2～11.8cmで、頂部はヘラ切り後ロクロナデである。375～383は有台杯で口径11cm台のもの（375～379・381・382）と14cm台（380・383）のものがある。281・283は無台杯で、このうち282は佐渡小泊産須恵器で、口径は10.9cm、焼成は還元軟質、ロクロ回転は左（反時計回り）、時期は８期である。678は土師器小甕で口縁端部は摘まみ上げている。

SP2334

長軸0.88m、短軸0.77m、深さ0.44m、SB12の柱穴である。覆土は２層に分かれるSB12は過半が調査区外にのびる桁行３間（7.9m）以上の掘立柱建物である。SP2334の出土土器は８点報告されている。26は須恵器杯蓋で内面に墨痕がある。226・227は須恵器無台杯で２点とも佐渡小泊産須恵器である。ロクロ回

第１表　本稿で用いる時期区分と主な資料

	時期区分			年代など
600	1段階	1期古	上越市峪ノ上遺跡SI１ 上越市一之口遺跡SI17	飛鳥Ⅰ（の一部）
		1期新	上越市延命寺遺跡SI006 上越市津倉田遺跡SI417	
		2期	上越市津倉田遺跡SI１・53・80・102 田上町行屋崎遺跡	
		3期	上越市津倉田遺跡SI62B・SX97 新潟市秋葉区大沢谷内遺跡SX945	飛鳥Ⅳ
700		4期	妙高市栗原遺跡SD25 上越市柿崎区木崎山遺跡２号竪穴住居	大宝元年（701）上限
		5期	長岡市八幡林遺跡A地区Ⅳ層 長岡市下ノ西遺跡SD201 長岡市下ノ西遺跡SD202 上越市延命寺遺跡SD1700	養老年間（717～724） 養老四または六年～天平二年（720または722～730） 神亀二年（725） 天平八年（736）
	2段階	6期	上越市今池遺跡SK24 長岡市八幡林遺跡H地区	
800		7期	上越市滝寺７号窯跡 上越市今池遺跡SK102	西暦775年（年輪年代、上限） 壺G
		8期	聖篭町山三賀Ⅱ遺跡SI1320・753ほか 阿賀野市山口遺跡SI2368・3048	
		9期	新潟市江南区駒首潟遺跡旧河川 新潟市西区釈迦堂遺跡Ⅸ層 阿賀野市蕪木遺跡SD21・32・110 長岡市八幡林遺跡Ⅰ地区上層	天安元～貞観元年（857～859） 貞観五年（863）
		10期	上越市子安遺跡SI354 新潟市江南区牛道遺跡SE234	
900	3段階	11期	村上市西部遺跡SD1377	O-53
		12期	長岡市門新遺跡SD152	延長六年（928）
		13期	上越市四ツ屋遺跡SK63	虎渓山１号
1,000		14期	上越市一之口遺跡東地区SD１´	丸石２号
		15期	糸魚川市角地田遺跡SK577・698	（明和27号）

転は左で、226は見込み外縁が窪む。時期は２点とも９期である。551・552は土師器無台椀で「三」または「川」の墨書が見られる。630は土師器皿の口縁部、631・632は土師器有台皿で、630には「三」または「川」の墨書が見られる。632は631に比べ高台径が小さく、高台の高さも低い。SB12を構成する他の柱穴にはSP2294・2682・2305があり、このうちSP2682から黒色土器の鉢（712）、SP2305から土師器有台皿（633）が出土している。

SF2672

南北方向の道路（状遺構）である。西側にのみ側溝がある。出土土器は10点報告されている。46は須恵器杯蓋で頂部に「北」と考えられる墨書が確認できる。363・364は須恵器有台杯で、364は363に比べ器高が高く、底部外面に「三」または「川」の墨書がある。243～246は須恵器無台杯で、243・245は底部が丸底気味になる。244・246は佐渡小泊産須恵器で、内面の口縁端部付近に稜線が巡る。時期は９期である。557・558・598は土師器無台椀。器高が低く、口径・底径が大きい598と598に比べ器高が高く口径・底径が小さい557がある。557はP2334出土の552と形態が類似する。245・246・598は下記のSD2649出土の土器と接合している。

SD2649

SF2672の側溝で、幅0.96m、深さ0.15mである。「遺物取り上げ時にSD2648出土遺物と混ざってしまい時代に幅がある」との記述がある。SD2648はSD2649を切る溝である。出土土器は20点報告されているが、第２図には18点を示した。除いた２点は判読が難しい墨書のある土師器小片である。92・93は須恵器杯蓋。93は摘みがつかない。394～396は須恵器有台杯。394・396は365に比べ器高が高い。270～273は須恵器無台杯。270は佐渡小泊産須恵器で、内面の口縁端部付近に稜線が巡る。時期は９期である。271～273は底部が丸底気味になる。589～595は土師器無台椀。591は他の土師器無台椀に比べ底部が厚い。594は口径15.8cm、高さ6.0cmと大型で、外面下半にはヘラケズリが施されている。595は「南」の墨書がある。689は鍋。外面は上半ロクロナデ、下半ヘラケズリ、内面は上半カキメ、下半ハケメである。口縁端部は玉縁状である。705は黒色土器の無台椀である。

SK2341

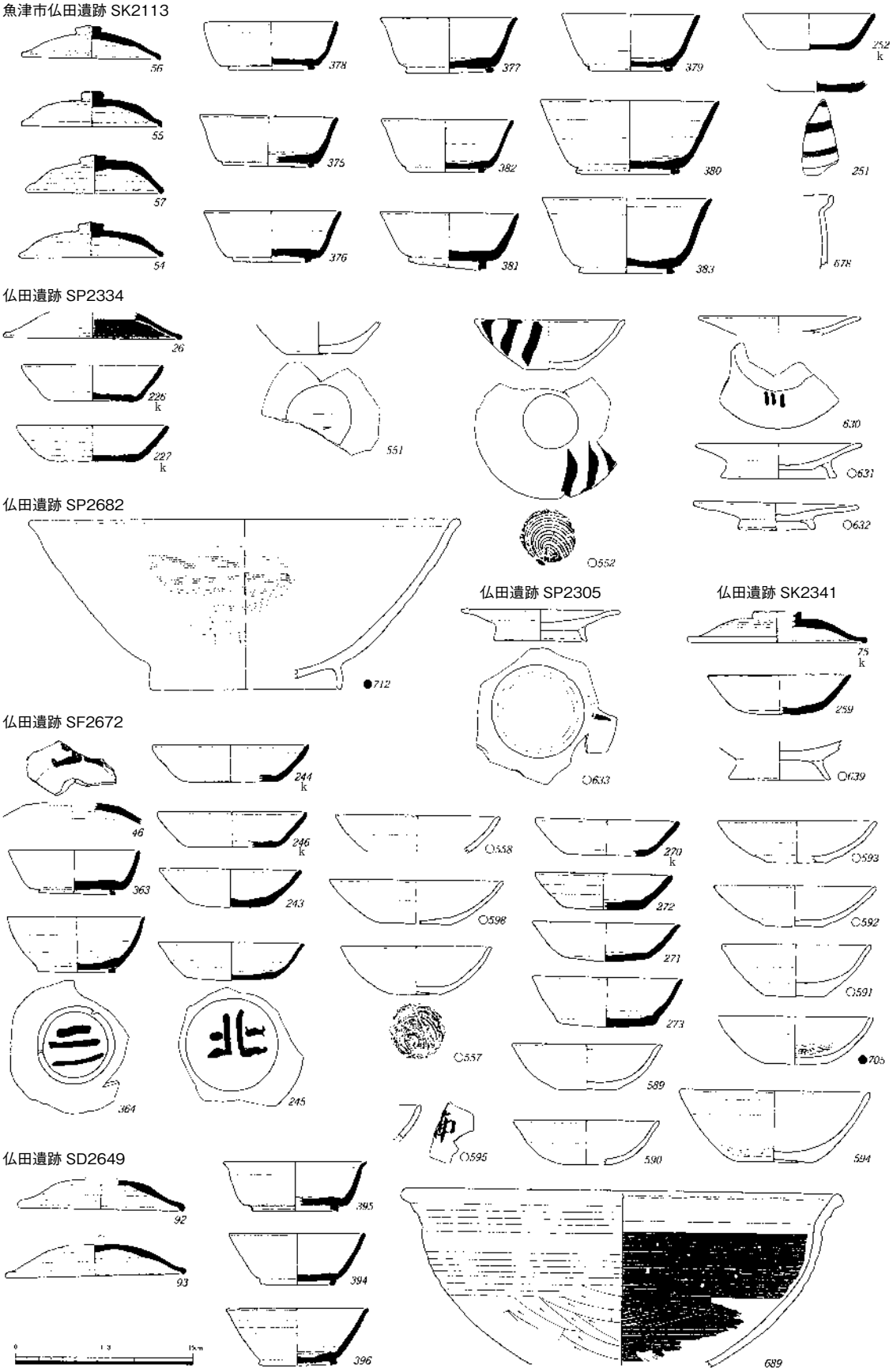
長軸0.44m、短軸0.36m、深さ0.30mの楕円形で、覆土は黒褐色砂質シルトの単層である。出土遺物は３点が報告されている。75は須恵器杯蓋。低く径の大きい摘みがつく。佐渡小泊産須恵器で時期は９期の可能性が高いが10期に下る可能性もある。259は須恵器無台杯で底部は丸底気味である。639は土師器有台皿で高い高台を持つ。

SK1688

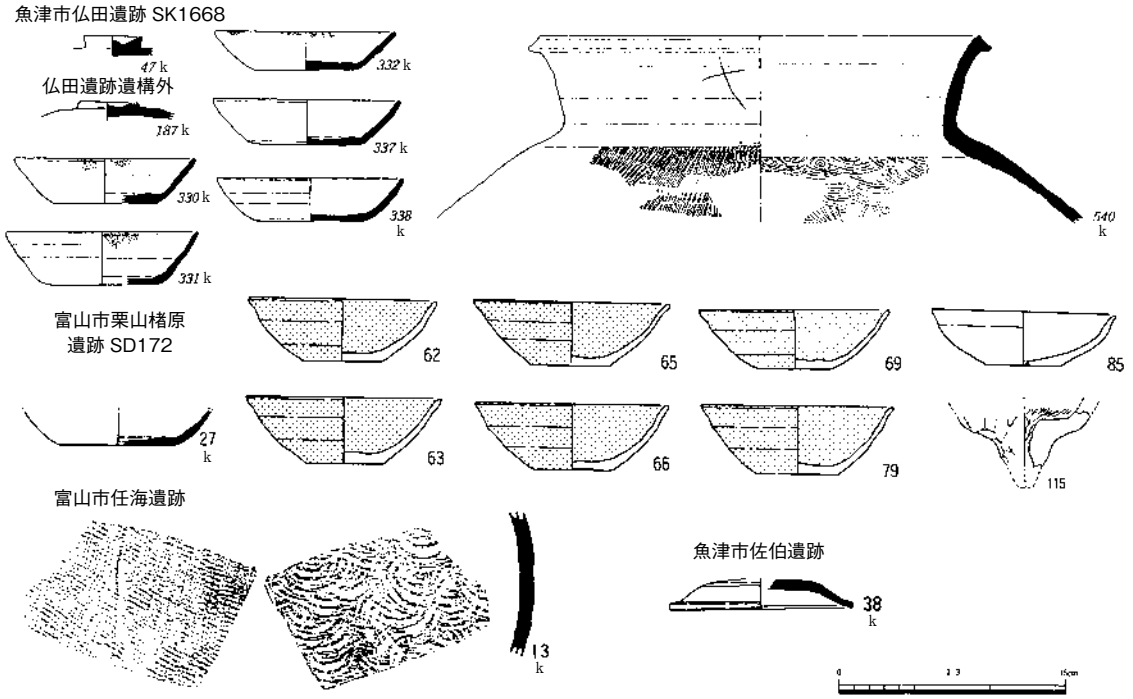
長軸1.54m、1.36m、深さ0.36mの円形で、覆土は３層に分かれる。「覆土に大きめの炭化物が混じること、下層を行ったと考えられるSK2529よりは小規模だが、周囲の土坑と比べると大きいことから、SK2529と同様、火葬をおこなった土坑と思われる」と報告されている。出土土器は１点が報告されている。47は須恵器杯蓋で環状で中央が盛り上がる摘みがある。佐渡小泊産須恵器で、時期は９期である。報告者は「胎土は、肉眼観察では上末産のものと思われたが、つまみが上末では見られない形をしており、胎土分析をしたところ、少なくとも上末の釜谷窯のものではなく、上末の釜谷以外の窯かあるいは産地不明という結果がでている」と報告している。

遺構外出土

187・300～332・337・338・540は遺構外から出土した小泊産須恵器である。187は杯蓋で「つまみが上



第２図　富山県東部の佐渡小泊産須恵器と関連資料１



第３図　富山県東部の佐渡小泊産須恵器と関連資料２

末では見られない形をしており、また、胎土も他の個体と比べ白色粒が特に多く入っている」と報告されている。時期は10期である。

330～332・337・338は無台杯である。時期は９期のものが大半と考えている。540は甕。外面に格子叩きがみられる。

（２）　富山市栗山楮原遺跡（富山県埋蔵文化財センター1990）

富山市南中田に所在し、神通川右岸の扇状地に位置する。現在の海岸から約15km内陸である。９・10世紀を中心とする集落遺跡である。

SD172

幅60cm、深さ30cmの溝で、道路状遺構（SF173）の側溝である。出土土器は製塩土器を含め９点報告されている。27は須恵器無台杯で、佐渡小泊産須恵器である。仏田遺跡SP2334・SF2672出土のものに比べ器壁が薄く時期は10期と判断した。62・63・65・66・69・79・85は土師器無台椀で、62・63・65・66・69・79は赤彩土師器と報告されている。85は赤彩されない土師器無台椀で、ほかのものに比べ器高が低い。115は棒状尖底の製塩土器である。

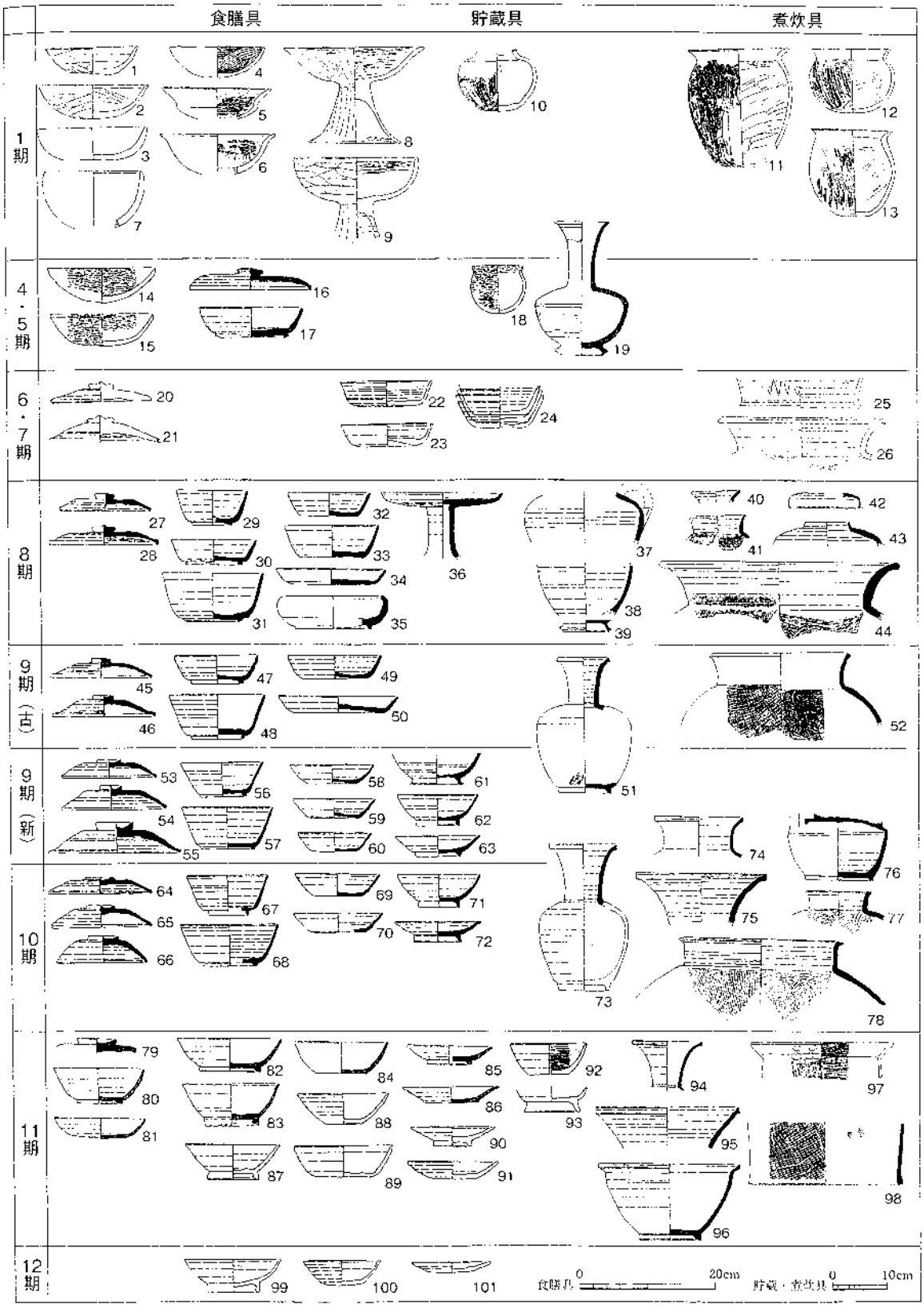
（３）任海遺跡（富山県埋蔵文化財センター1993）

富山市任海に所在し、神通川右岸の扇状地に位置する遺跡である。栗原楮原遺跡の北側に近接する。1992（平成４）年の調査では土坑・溝など９世紀代の土器が出土している。

13は須恵器横瓶で佐渡小泊産須恵器である。時期は８～10期のいずれかであろう。

（４）魚津市佐伯遺跡（富山県教育委員会1979）

魚津市佐伯地内に所在し、早月川右岸の丘陵先端付近に位置する。縄文時代・弥生時代・古代の遺跡である。古代は竪穴建物１軒、掘立柱建物26棟が検出されている。38は須恵器杯蓋で小泊産須恵器である。時期は８期ないしは９期である。内面の重ね焼きは北野分類（北野1988）のⅡa類だが、外面先端付近が



第４図　佐渡島における７～10世紀の土器の変遷
（春日2019cを縮小転載　土器の縮尺は食膳具１：８、貯蔵・煮炊具１：10だったものを91％縮小）

降灰、内面が中央部を除き黒化しており、倒位に置いた有台杯の底部に正位に杯蓋を置き、その上に倒位の有台杯を置いたものと考える。

（５）下新川郡入善町じょうべのま遺跡（入善町教育委員会1975）

下新川郡入善町田中に所在し、黒部川右岸の扇状地末端付近に位置する。現在の海岸までの距離は約50ｍである。入善町町民会館に出土遺物の一部が展示されている。ガラス越しに土器を見たが、佐渡小泊産須恵器の可能性が高い杯蓋・甕などが確認できた。報告遺物のどれに当たるかは判断できていない。出土した須恵器の中に佐渡小泊産須恵器が複数存在している可能性が高い。

２　仏田遺跡の報告書内での胎土の分類と蛍光Ｘ線分析の結果

仏田遺跡の報告書では須恵器の胎土について10種（胎土番号１～10）に分類している。分類の内容に関する記述は確認できなかったが、典型例について表面や断面のカラー写真が掲載されている。また、三辻利一により蛍光Ｘ線分析が行われ、K、Ca、Fe、Rb、Sr、Naの数値とこれに基づく推定産地が示されている。

第２表に１－（１）で佐渡小泊産須恵器とした須恵器と仏田遺跡の報告書内での胎土の分類（胎土番号）と三辻が示した推定産地を示した。

第３表に筆者が佐渡小泊産須恵器と判断し、かつ蛍光Ｘ線分析が行われている報告番号47・187・540の３個体４点（540については２点の分析が行われている）の元素の数値を示した。

第４表に山三賀Ⅱ遺跡の報告書（新潟県教育委員会1989）の中で三辻が示した佐渡小泊産須恵器の主要元素（K・Ca・Fe・Rb・Sr・Na）の数値を示した。

第４図には仏田遺跡で蛍光Ｘ線分析を行った須恵器の全体と胎土番号毎（胎土番号９・10は少数のため省略）のK－Ca、Rb－Sr分布図を示した。分布図上の「釜谷領域」は富山県中新川郡立山町に所在する上末窯跡群の釜谷３・４号出土須恵器のK－Ca、Rb－Sr分布領域、「万年寺領域」は滑川市に所在する万年寺窯跡出土須恵器のK－Ca、Rb－Sr分布領域、ぐみ谷奥領域は南砺市に所在する安居・岩木窯跡群のぐみ谷奥窯跡出土須恵器のK－Ca、Rb－Sr分布領域である。

以下、第２～４表、第４図から確認できたことを列挙する。

1　第２表を見ると、筆者が佐渡小泊産須恵器と判断した15点には、仏田遺跡の胎土番号１・２・４・７・８の５種があり、１が４点、２が３点、４が３点、７が４点、８が１点である。仏田遺跡の胎土番号（胎土の分類）と筆者の目視による判断は、あまり調和的でない。

2　佐渡小泊産須恵器と判断した須恵器のうち報告番号47・187・540は蛍光Ｘ線分析が行われており、推定産地は47が「不明」、187は釜谷、540は「小泊か」となっており、筆者の目視による判断と三辻の推定産地は、あまり調和的でない。

3　第３表を見るとCaとSrの数値は報告番号47・187と540で大きく異なるがK、Rbの数値は近似している。Kの値が0.334～0.376、Rbの数値が0.401～0.496の範囲にあり、主要元素の数値はある程度まとまりがある。

4　第４表は仏田遺跡の報告書が刊行された2013年からは20年以上前のデータであるが、第３表の数値を第４表に当てはめてみると、比較的近似した数値ともいえる。

5　第４図を見ると蛍光Ｘ線分析を行った須恵器の多くは釜谷領域に含まれるが、これから外れるものも少量存在する。

6　胎土番号１～７の大半は釜谷領域に含まれる。このうち胎土番号１・５・６は釜谷領域の中かこれに近いもので占められるが、胎土番号２・３・４・７にはこれから大きく外れるものもある。

7　報告番号47・187・540のKは全て0.4以下、Rbは0.5以下で釜谷領域からは外れる。こうした須恵器は仏田遺跡出土の須恵器の中では少数である。

以上のように筆者が目視で判断した「佐渡小泊産須恵器」は仏田遺跡の胎土分類（胎土番号）や三辻による推定産地とは調和的でない。一方、３個体４点と点数は少ないものの、蛍光Ｘ線分析による主要元素の数値を見ると、これら３個体は佐渡小泊産須恵器と判断することも可能である。

第２表　仏田遺跡の「小泊産須恵器」・「胎土番号」・「推定産地」

番号	器種	出土地点	胎土番号	試料No.	推定産地
47	杯蓋	SK1688	2	15	不明（32・81と同じ）
75	杯蓋	SK2341	2		
187	杯蓋	X50Y80Ⅱ層	4	34	釜谷
226	無台杯	SP2334	7		
227	無台杯	SP2334	2		
244	無台杯	SF2672	7		
246	無台杯	SF267・SD2649	7		
252	無台杯	SK2113	1		
270	無台杯	SD2649	1		
330	無台杯	X60Y88Ⅱ層	4		
331	無台杯	X61Y89Ⅱ層	4		
332	無台杯	X58Y89Ⅱ層	1		
337	無台杯	X59Y88Ⅱ層ほか	7		
338	無台杯	X79Y92Ⅱ層	1		
540	甕	X61Y89Ⅱ層ほか	8	97・98	小泊か

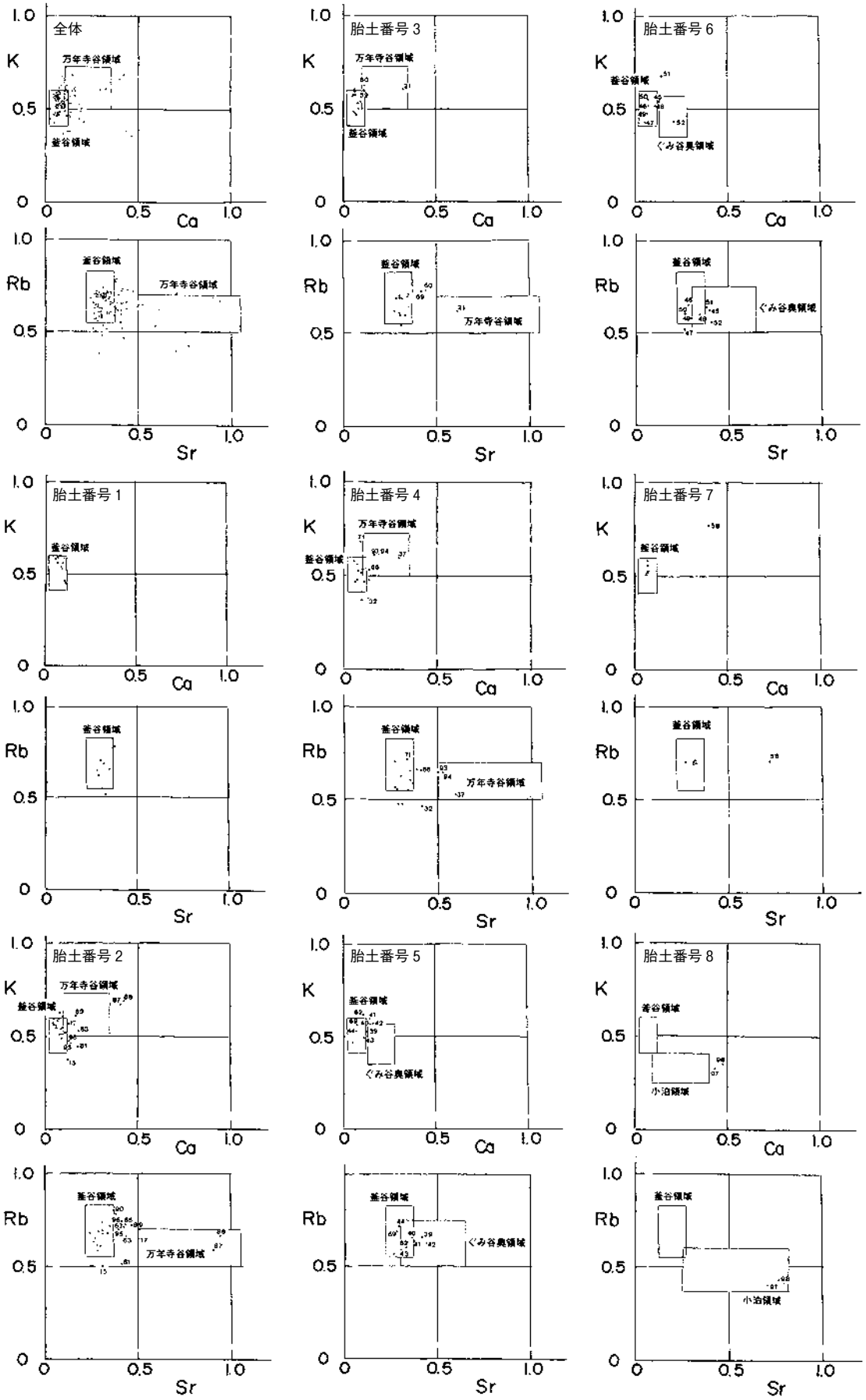
＊胎土分析No.32は胎土番号４、胎土分析No.81は胎土番号２

第３表　仏田遺跡出土佐渡小泊産須恵器の胎土分析データ

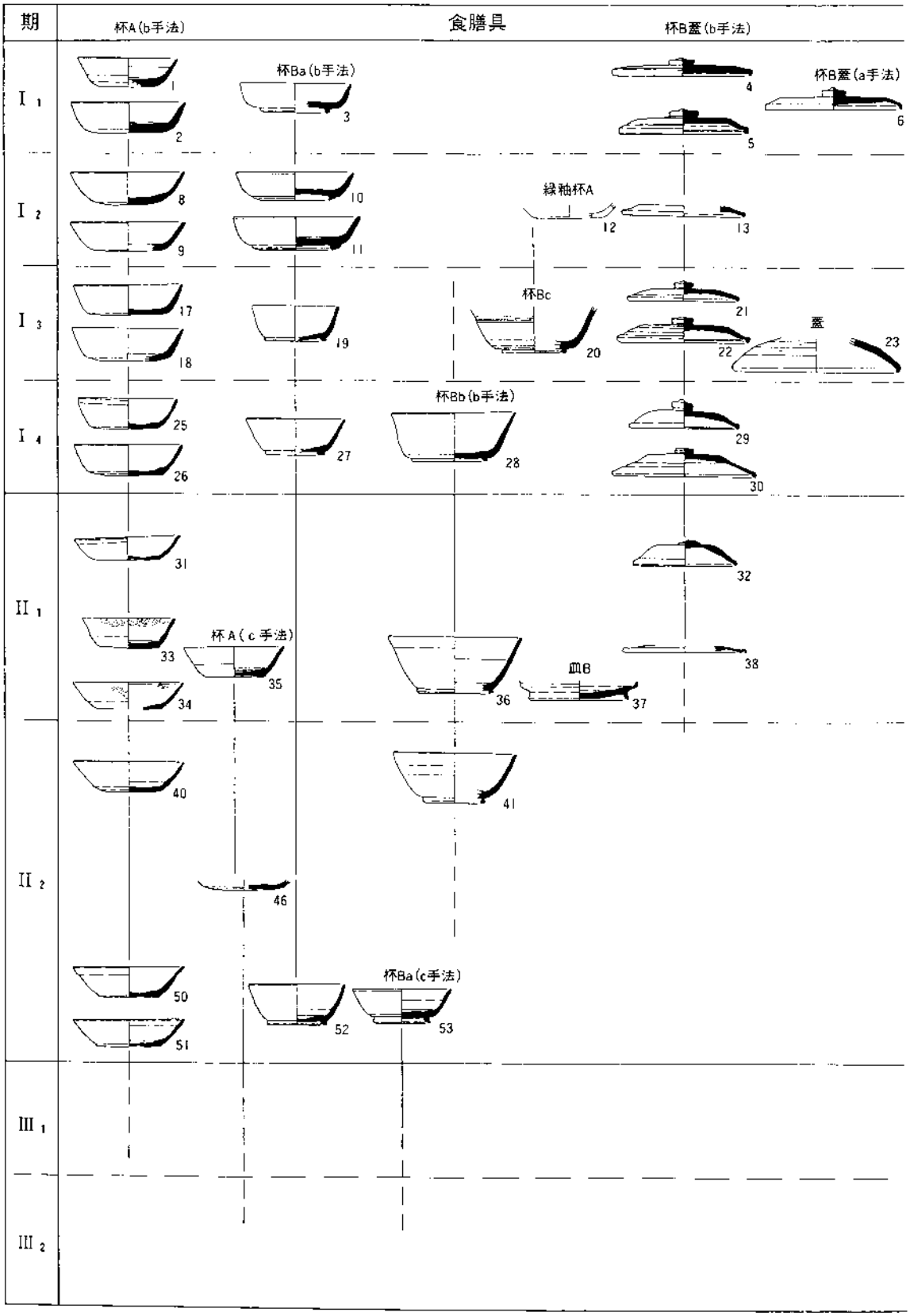
試料No.	報告No.	種類	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	胎土番号	推定産地
15	47	須恵器	杯蓋	0.376	0.123	2.84	0.496	0.306	0.123	2	不明
34	187	須恵器	杯蓋	0.366	0.096	2.99	0.476	0.294	0.084	4	釜谷
97	540	須恵器	甕	0.334	0.433	2.74	0.401	0.705	0.287	8	小泊
98	540	須恵器	甕	0.356	0.469	2.67	0.431	0.771	0.295	8	小泊

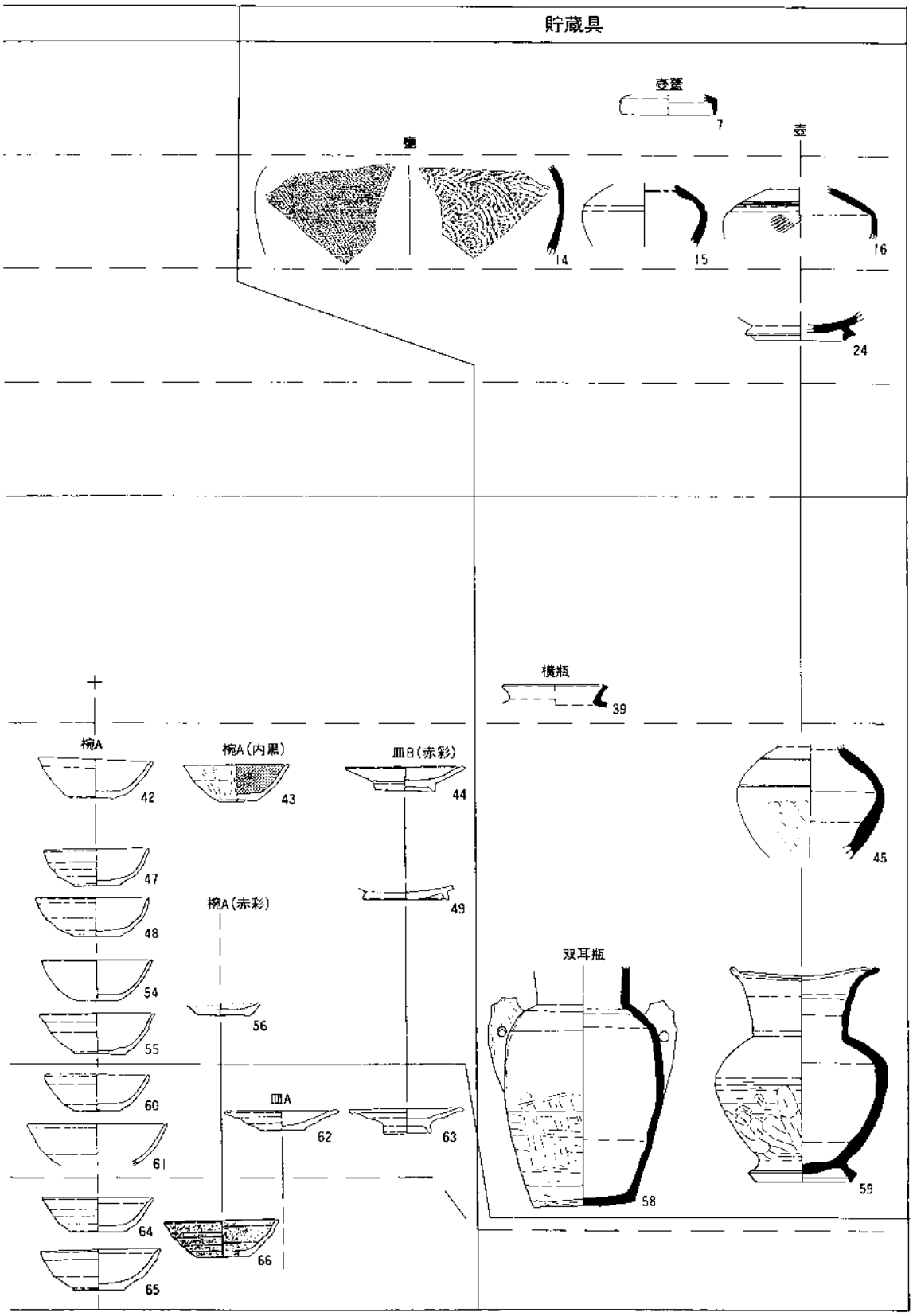
第４表　佐渡小泊産須恵器の主要元素の数値

元素	K	Ca	Rb	Sr
数値	0.371±0.051 （0.422～0.320）	0.216±0.084 （0.300～0.132）	0.463±0.070 （0.533～0.393）	0.436±0.142 （0.578～0.294）



第５図　魚津市仏田遺跡出土須恵器のK－Ca、Rb－Sr分布（三辻2013の一部を転載）


期
食膳具
杯A(b手法)
杯Ba(b手法)
杯B蓋(b手法)
杯B蓋(a手法)
緑釉杯A
杯Bc
蓋
杯Bb(b手法)
杯A(c手法)
皿B
杯Ba(c手法)
I 1
I 2
I 3
I 4
II 1
II 2
III 1
III 2



第６図　富山市南中田Ｄ遺跡の土器編年（岡本1991を縮小転載、土器の縮尺１：６を88%縮小）

まとめ

前章の検討を踏まえると、筆者が目視で確認した佐渡小泊産須恵器は問題点がないわけではないが、以下では佐渡小泊産須恵器との前提で記述を進める。

（1） 佐渡小泊産須恵器の流通

佐渡小泊産須恵器は富山県東部では魚津市佐伯遺跡、同市仏田遺跡、富山市任海遺跡、同市栗山楮原遺跡の４遺跡で出土しており、下新川郡入善町じょうべのま遺跡でも出土している可能性が高い。確認できた点数は魚津市仏田遺跡を除くと、１点のみである。ただし下新川郡入善町じょうべのま遺跡では複数の佐渡小泊産須恵器が出土している可能性がある。同じ魚津市内でも東端に近い片貝川左岸の仏田遺跡では一定量の佐渡小泊産須恵器が確認できるが、西端に近い早月川右岸の佐伯遺跡では１点のみの出土で、出土量に差がある可能性がある。富山市の２遺跡も１点のみの出土で、一定量流通したのは魚津市の西部あたりまでであった可能性が高い。

器種を見ると仏田遺跡では杯蓋・無台杯・甕が確認でき、杯蓋が確認できることから有台杯も存在した可能性がある。佐伯遺跡では杯蓋、任海遺跡では横瓶、栗山楮原遺跡では無台杯が確認できた。また、じょうべのま遺跡では杯蓋・甕が出土している可能性がある。以上のように富山県東部で出土する小泊産須恵器には杯蓋・無台杯・横瓶・甕があり、杯蓋が存在することから有台杯も存在した可能性が高い。また越後では一定量確認できる長頸瓶は富山県東部では未確認である。

時期を確認すると、仏田遺跡では８～10期のものが確認でき、９期のものが多い。佐伯遺跡は８期、栗山楮原遺跡は10期、任海遺跡のものは８～10期である。越後でも佐渡小泊産須恵器は８期には相当量確認でき、11期には大幅に減少している。流通しはじめる時期と流通しなくなる時期は越後と類似した状況と考えられる。

（2） 編年的位置

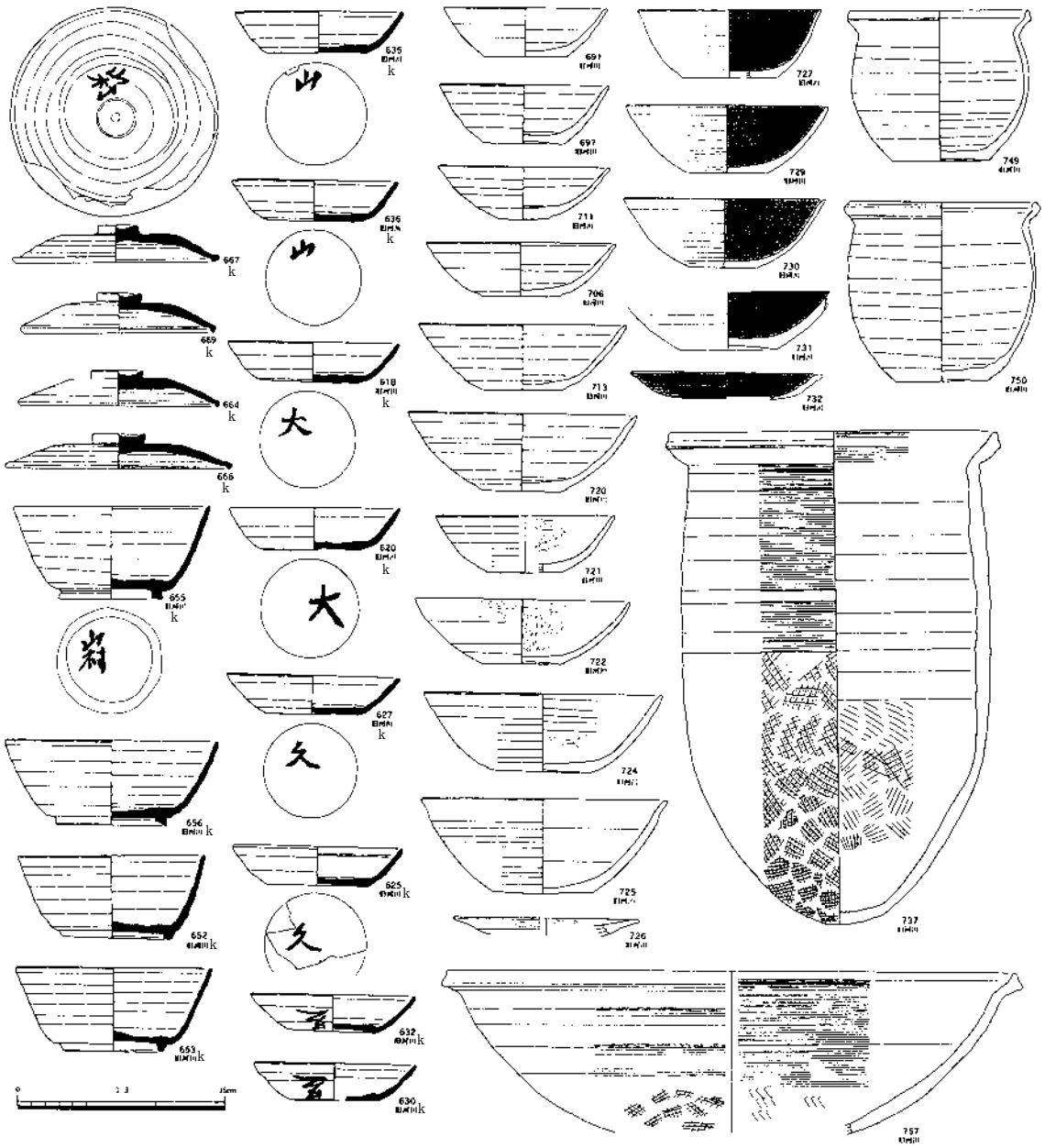
仏田遺跡では８・９期、栗山楮原遺跡では10期の佐渡小泊産須恵器が在地産と推測される須恵器・土師器が同一遺構から出土している。これらについて南中田Ｄ遺跡の発掘調査報告書で示された岡本淳一郎の編年（岡本1991、第６図）との対比を行いたい。

８期の佐渡小泊産須恵器が伴った仏田遺跡SK2113出土土器（第２図）は土師器食膳具を伴っていない。大型の有台杯（380・383）の形態は第６図28よりも36に近い。このことからSK2113出土土器は岡本編年のⅡ１期の土器群と考える。

９期の佐渡小泊産須恵器が伴ったSP2334・SF2672・SD2649出土土器（第２図）は須恵器食膳具のほかに土師器食膳具が一定量みられる。またSF2672出土の小型の須恵器有台杯364は第６図52に、SD2649出土の須恵器無台杯273は第６図40に、SP2334出土の土師器有台皿631は第６図49に形態が似ている。このことから岡本編年のⅡ２期の土器群と考える。

10期の佐渡小泊産須恵器が伴った栗山楮原SD172出土土器（第３図）は食膳具のほとんどが土師器であり、須恵器食膳具は佐渡小泊産須恵器の27のみである。岡本編年のⅢ期の資料と考えられる。土師器無台椀の形態は64・65よりも60に近いものが多い。Ⅲ期の中でもⅢ１期の土器と考える。

第７図には９期の資料である新潟市江南区駒首潟遺跡旧河川出土の出土土器を示した。駒首潟遺跡旧河川からは３点の習書木簡が出土しているが、このうち３号木簡には「大納言阿倍大夫殿資人」の文字があり、「大納言阿倍大夫殿」は安倍安仁と考えられ、安倍安仁の大納言就任期間は天安元年～貞観元年（857～859）である。これは９期の年代の一端を示すものと考えうる。８期と10期の暦年代を示す良好な資料



第７図　新潟市江南区駒首潟遺跡旧河川出土土器（９期）

は現在のところ無いが、９期の年代の一端が天安元年～貞観元年（857～859）とすれば８期は９世紀第２四半期頃、10期は９世紀第４四半期頃の暦年代が考えられる。岡本はⅡ期の年代を９世紀中頃～末、Ⅲ期を９世紀末～10世紀と想定しているが、これは駒首潟遺跡旧河川出土木簡から想定される８～10期の暦年代と概ね一致する。

本稿作成に際し、安念幹倫、岡本淳一郎、境　洋子、田中道子の各氏から資料閲覧ついてご配慮いただきました。また岡本淳一郎氏からは仏田遺跡出土土器の年代について、田中道子氏からは富山県の古代須恵器の重ね焼きや須恵器窯の分布についてご教示をうけました。お礼申し上げます。

文末になりましたが、筆者に吉田町史資料編１を執筆する機会を与えていただいた本間敏則さんが、昨年古希を迎えられましたことお祝い申し上げます。これからもお元気で、日々愉しく考古学を研究される事を心から祈念しています。

註

（１）瓦も生産している。

引用参考文献

石川考古学研究会・北陸古代土器研究会　1988『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題』資料編

岡本淳一郎　1991「Ｃ　古代土器について」『富山県富山市南中田Ｄ遺跡発掘調査報告書』富山県埋蔵文化財センター

公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2013『富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書　第58集　仏田遺跡発掘調査報告』

春日真実　2019ａ「第５章古代　第１節　総論」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会

春日真実　2019ｂ「第５章古代　第２節第１項　土師器・須恵器の器種分類」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会

春日真実　2019ｃ「第５章古代　第２節第８項　佐渡」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会

春日真実　2022「新潟県における年代定点資料」『東国古代遺跡研究会第11回研究大会　古代東国における年代定点資料の検討』東国古代遺跡研究会

北野博司　1988「重ね焼きの観察」『石川県能美郡辰口町　辰口西部遺跡群Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター

富山県教育委員会　1979『富山県魚津市佐伯遺跡』

富山県埋蔵文化財センター　1990『富山県総合運動公園内遺跡群発掘調査概要Ⅰ　栗山楮原遺跡　南中田Ａ遺跡　任海鎌倉遺跡　南中田Ｃ遺跡』

富山県埋蔵文化財センター　1991『富山県富山市南中田Ｄ遺跡発掘調査報告書』

富山県埋蔵文化財センター　1993『富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告（３）　任海遺跡　吉倉Ａ遺跡　吉倉Ｂ遺跡』

新潟県教育委員会　1989『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第53集　山三賀Ⅱ遺跡』

新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　1999『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第91集　牛道遺跡』

新潟市教育委員会　2009『駒首潟遺跡　第３・４次調査』

入善町教育委員会　1975『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要（３）』

三辻利一　1989「１　山三賀Ⅱ遺跡出土須恵器の胎土分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第53集　山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会

三辻利一　2013「須恵器、土師器の蛍光Ｘ線分析」『富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書　第58集　仏田遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所